

対話がつむぐ 過去、現在、未来

ARTIST'S VIEW / インタビュー

ルイサ・ウンガル LUISA UNGAR

特集 「まえばしむかしばなし」

アーティストコラム 滝沢達史

アーティストが見た前橋

ARTIST'S VIEW



アーティストが切り取った前橋を紹介するコーナー

LUISA UNGAR

ルイサ・ウングアル



1



2



3



4



5



6

①巨大なカニが建物を登っている。②喫茶こまちの北原さん夫婦にちんどんの演奏を習う。③赤城神社で空を見渡している犬。④七夕祭りで「ガッジーラ」に遭遇した。⑤お茶の専門店「山都園」の岡部さんとケンセイ。⑥商店街の大橋さん夫妻が夕食会に招待してくれた。

INTERVIEW

時代を経て 語り継がれていく物語 THE STORIES HANDED DOWN THROUGH THE AGES.

通訳：海老原周子
(Art Translators Collective)

独自の視点から事物を観察し、アートとして表現するアーティストの目に、この街の風景や人々はどんな風に見えるのだろうか。

ルイサ・ウングアルさんは、コロンビアとオランダ・アムステルダムを拠点に活動するアーティスト。教育者の経験を持つ彼女のアートプロジェクトにはアカデミックな側面とユーモアが同居する。今回滞在制作の招聘アーティストとして前橋のリサーチに来た彼女に、作品へのアプローチや前橋の印象などを聞いた。

ーコロンビアとオランダ・アムステルダムを中心に活動されているそうですが、日本に来るのは何回目ですか？初めてです。

ー前橋にどんな印象を持ちましたか？

特に印象に残ったのは、街とか人とか建物ですね。古い建物と近代的な新しい建物が混在する街並みがすごく新鮮でした。

ー前橋のこの辺りだと、アーケードの商店街が我々にとっても印象的な風景なんですけど、コロンビアや他の国でも似たような風景があるんでしょうか？

コロンビアのボコタという都市の出身なんですけど、見た目はちょっと違いますが同じような商店街があります。19世紀末からフランスやスペインなどから移民が来ているので、おそらくその影響だと思うんですけど。

ーコロンビアってどういう国ですか？

一言でこんな国って言うのは難しいんですけど、人も地域もとても多様性に富んでいます。赤道直下なので

季節がないんですよ。その代わり、地域によって高度が違うので、山の方は山の気候があって、雪が積もるところもあるし、逆に海側の方は、南国的なトロピカルな気候だったりと。

ー島国の日本とはかなり違いを感じますね。

おっしゃる通り、日本は島国というのが、他の国との違いを際立たせているように感じました。

ー作品についてお聞きしたいのですが、コロンビアの動物園でのツアーガイドのパフォーマンス（「Guided Zoo Visit」）がとても面白かったです。パフォーマンスをやりようと思ったきっかけは何かあったんでしょうか？

実はきっかけが二つあって、一つは先生として大学で芸術理論を教えていたんですけど、自分が教えているものが正しいとか正しくないとか、知識として体系化されてるじゃないですか。でも何がそういった体系化された知識になって、何がそうならないのか。そういうことに関心があったんです。例えば歴史の場合は、歴史上の事実を教えますよね。科学とか理科とかだったら、科学的に合ってるか合っていないか、そういうことを教えますが、アートって言うのは、そういった物事に対してそれは本当にそうなの？っていう問いかけをする、そういった部分があると思っています。もう一つの理由としては、演劇的な表現方法にも関心を持っていたんです。私たちが日常的にどんなふうにコミュニケーションを取るか、ということに関心があって、例えばツアーガイドとか動物園ガイドとか、それ自体が一つのフォーマットとしてありますよね。そういった既存の形式に揺さぶりをかけるということに関心があって。ユーモアと、フィクションと現実、そういったものを行ったり来たりしながら揺さぶりをかけていくような行為をしてみたいと思ったのがきっかけです。

ー民話や伝承に興味があるとおっしゃっていましたが、今回のリサーチでたくさん面白い話を聞きました。特に、動物の話がどんなふうに地域に伝わるのかというところに関心が湧きました。私の作品の中でも、植民地支配の関係を象徴的に表したものとして動物の

モチーフを取り上げていますが、日本では植民地的な歴史背景はないので、物語における動物の現れ方にはまた別の文脈があると思います。赤城神社の神様がムカデで、日光の方が大蛇で、戦って負けちゃった話や、それから飛石稲荷の話とかも聞きました。17世紀の伝承ですね。その時代に書かれた風土記があって、それを現代になって専門家の方が研究していて、その話が今度は私に伝わっていく。そういった物語とか知識が、時代を経てどんどん語り継がれていくということがとても面白いと思いました。

ーアートが社会や人々に及ぼす影響についてどう考えていますか？

今回のリサーチでの話を例として紹介したいのですが、紙芝居の専門家の方と会って、1930年代に紙芝居にも検閲が入った時代があったという話を聞きました。紙芝居居てもともと後ろに文章がなくて、伝え方に幅があったんですね。でも戦争に入る時代だったので、紙芝居にも検閲が入るようになり、どのように読むかというルールが作られたそうなんです。それで、この物語はこの形でしか伝えてはいけないというふうになってしまった。厳しくなる前は、いろんなユーモアを入れたり、冗談を挟んだりしていたそうなんですけど。おそらく他の文化とか国でも、生活表現とか社会的表現といった表現活動が国や政府に影響を受けるということがあると思います。アーティストが社会にとって良い存在かとか、良いものをもたらすかというのは分からないんですけど、アートというものは、物事を伝えるときに、一つの方法でこれだけというのではなく、色々な文脈、色々な解釈、色々な手法で伝えるもので、より人生を豊かにしたりとか、人生になにか揺さぶりをかけるという役割を持っていると思います。



Photo: 土屋ワカ

LUISA UNGAR | ルイサ・ウングアル

物語の伝承のされ方や歴史が構築される過程、物語の中で何かの象徴として登場する動物たちに興味があり、それらをモチーフとして作品を制作する。作品はパフォーマンスやインスタレーション、ドローイング、テキストなどさまざま。前橋では今回のリサーチを経て、今年の10月中旬から11月にかけて、「豎町スタジオ」を拠点に滞在制作を行う。

過去と現在をつなぐ物語は どんな過程をたどってきたのだろうか？

「伝承」「言い伝え」という言葉が示すように、人から人へ伝えるという行為がなければこれらの物語は成立しないでしょう。話の伝達の過程において、尾ひれがつき歪曲され誇張されるのは昔話に限ったことではありません。古くから語り継がれ今日に伝わる民話や伝承は、どんな過程を経てその形に落ち着いたのでしょうか。

この特集では、前橋に伝わる民話を紹介します。



前橋の語り部
おとねさん

STORY 1

いわがみ とびいし
岩神の飛石



群馬大学医学部の近くの「飛石稲荷」には、この土地に古くからある大きな岩が祀ってあるんだが、その昔、この岩を石材として利用しようと石工たちが集まったそう。石工の一人が岩にノミをコーンと打ち込んだが、二つ三つ音がしたかと思うと、それっきり静かになってしまった。不思議に思った仲間が見てみると、ノミを打った石工が顔を真っ青にしてうずくまっておった。そしてノミを入れた岩からは真っ赤な血が噴き出していたんだと。その石工は手が痺れて、ついには死んでしまったそう。これを祟りとおそれた人々は、岩を祀り神社を建てたんじや。この岩は、赤城山が大爆発したときに溶岩と一緒に流れてきたとも、利根川の大洪水で片石山の一部が欠けて流れ着いたとも、浅間山の大噴火のときに飛んできたともいわれておるんじや。

参考文献

井野誠一・井野修二『前橋・勢多西の伝説』あかぎ出版,2000.
佐藤寅男『前橋の伝説百話』前橋市観光協会,1974.

STORY 2

えん いわ
お艶が岩



敷島公園のポート池の南にある池の中に、赤みを帯びた大岩がある。利根川がこの辺りを流れていたむかし、川の東の村に美しい娘がおったそう。娘は川の西にある村の青年と恋に落ちた。青年は娘に会いに川を渡って来たが、しだいに気持ちは冷め、やがて姿を見せなくなってしまった。お艶は来る日も来る日も河原に立って青年を待ったが、待てど暮らせど青年は二度と姿を現さなかった。かわいそうなお艶はすっかりやつれてしまつてな、ある日この岩の上から、青年の名を呼びながら濁流に身を投げてしまったそう。このお艶が岩は、岩神の飛石とまったく同じ性質を持つってな、かつてはどこかの場所て同じ一つの岩だったといわれとるんじや。

STORY 3

ばんどうたろういわ
坂東太郎岩



利根川は「坂東太郎」と呼ばれ、筑紫二郎（筑後川）、四国三郎（吉野川）とともに日本三大河といわれておるんじや。その昔、お伊勢参りに出かけた男がいたが、道中でお金を使い果たし、ついに宿賃を払えなくなってしまった。男は宿の主人に事情を話し、国に帰ったら必ず金を送ると約束したそう。それから、いつになっても約束の金が送られてこないの、宿の主人は若者を上州につかわした。若者は男が残した「上州の坂東太郎」という名を頼りに尋ね歩いたが、誰に聞いても知らんという。途方に暮れた若者が国に帰ろうと利根川の縁まで来たとき、ふと岩の上を見ると、宿銭ときっちり同じ額のお金に乗せてある。これに気づいた若者はその金を持って国に帰ったそう。それ以来、この岩を「坂東太郎岩」というようになったんじや。

特 集

まえしばしむかしばなし

STORY 4

神様の
たたかい



大昔の話じゃ。二荒（日光）男体山の神様と赤城山の神様が、湖水のことで争った。赤城の神様はムカデに、二荒の神様は大蛇に姿を変えて戦ったそう。二荒の神様は鹿島の神様の助言で小野猿麻呂という弓の名人を味方につけた。猿麻呂が神々の戦いの場に赴くと、一方では数知れぬムカデの大群が攻め寄せ、一方では大小あまたの蛇がこれを防いでいる最中じゃった。猿麻呂はその中でもひときわ大きなムカデが立派な大蛇と戦っているのを見極めると「これこそ赤城の神なるや」と大ムカデの左の目を矢で射抜いた。傷を負って逃げ去るムカデを猿麻呂は利根川まで追いかけた。そのとき大ムカデの血が流れて木々が赤く染まったんで、この山を赤木山（赤城山）と呼ぶようになったそう。

STORY 5

てんぐいわ ようすい
天狗岩用水



その昔、秋元長朝という総社の殿様がおつてな、関ヶ原の戦いのあと、戦で荒れ果てた領地を実り豊かな土地にしようと、利根川から水を引く工事を計画したんだが、大小の岩に阻まれて工事はなかなか進まない。最後には大きな岩が立ちのびて工事は中断してしまったそう。人々が困り果てておると、ある日一人の山伏が現れて「岩の周りに薪を積み重ねて火を付けなさい。火が消えたら岩が熱いうちに水をかけなさい。そうすれば岩が割れる」と言ったそう。人々は最初は半信半疑でおつたが、言われたとおりにしてみると見事に岩が割れた。人々がお礼を言おうと思ったときには山伏の姿は消えておつた。それから誰となくあの山伏は天狗の化身ではないかと言い出してな、完成したこの用水路を天狗岩用水と呼ぶようになったんじや。

STORY 6

うまやばしじょう
厩橋城の
タヌキ



時は戦国時代。厩橋城に上杉謙信がおつた頃、北条・武田の軍勢が城に攻め込んだ。上杉方は必死に応戦したが、数に押されてあわや落城かと思われた。そのとき、闇の中からにわかに聞こえる（とき）の声をあげ、手に松明を持ったおびたらしい軍勢が現れて敵に襲いかかった。たちまち形勢は逆転し、上杉方は勝利を取めたが、夜が明けてみると援軍の姿はどこにもない。そのかわり戦場には血の滲んだ獣の毛が散り乱れていたそう。そして草のかげから、血まみれで息も絶え絶えの大狸が一匹見つかった。狸は「自分は長年この城に住んでいる狸で、合戦に城の運命も危ういと思い助太刀した。命もこれまでとなったが、せめてもの恩返しができてうれしい」と言い残して、息絶えたんじやと。

いいどい
飯土井の

猫山

STORY 7



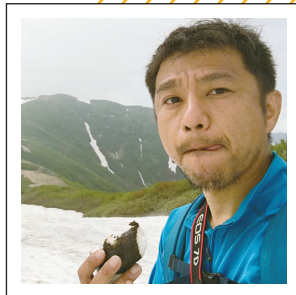
飯土井町のはずれの猫山と呼ばれる場所にはこんな言い伝えがある。むかし飯土井町の隣村に祐庵という医者が住んでおつた。あるとき祐庵が往診の帰りにこの辺りを通りかかると、林の奥からがやがやと話し声が聞こえてきた。祐庵がそっと木の陰から覗いてみると、大勢の猫たちが集まって話をしておる。しかし驚いたことに、車座になった猫たちの中に、祐庵が家で飼っておるクロにそっくりな黒猫がいて、「おい、クロ、今夜は遅かったじゃないか」「夕食のおじやが熱くて遅れました」などと話してるじゃあないか。それから猫たちは、賑やかなお囃子に合わせて猫踊りを始めた。驚いた祐庵は急いで我が家へ帰ると、確かに夕飯はおじやだったそう。この話が村に広まって、いつの頃からかこの山を「猫山」と呼ぶようになったそう。

「私のおすすめアイテム」 滝沢達史

私のおすすめアイテムは「携帯調理セット」である。もともとアウトドアの趣味があるため野外での調理器具は一通り揃っているのだが、2011年の震災をきっかけに災害時の備えとして2日分の食料を車に常備するようになった。地方や野外での制作が多いため、車での移動と外泊が続く。スケジュールをうまく組み立てることができれば良いが、予定通りに行かないのもアーティストの性分である。そんな時、この「携帯調理セット」があればいつでもどこでも道半ばで寝泊まりが可能となる。車もワンボックスカーであるため寝る不自由はない。動きたい時に動き、止まりたい時に止まる、というスタイルがここ数年は気に入っている。

「携帯調理セット」には以下のアイテムが収納されている。[ガスボンベ、ゴトク、ライター、ナベ、ナイフ、箸、コップ、塩、味噌、アルファ米、レトルト食品、缶詰、ティッシュ、手ぬぐい、水]。これらがあれば自然の食材を即座に調達して食すことも可能である。海では貝や海苔を、山では山菜や筍などを収穫し、味わうことができる。短期間ではあっても生存システムを自己完結できることは、日常生活の安心感にもつながっているのではないかなと思われる。

そしてまた、目的地に向かう途中の見知らぬ街や森で一夜を明かすと、普段の生活とは違う時間感覚にも出会うことができる。「何気ない公園の夜の闇は人から解放されて生き生きと夜の会話を交わしている」。そんな妄想の中で眠りにつくこともできるのである。というわけで、みなさまのライフラインの確保にもなるであろうから、是非お勧めしたいのである。



滝沢達史 (たきざわ・たつし)

多摩美術大学油画専攻卒業。東京都特別支援学校にて知的障害児への美術教育に携わり、のちに退職。以後、越後妻有トリエンナーレなど国内の芸術祭にて、土地との関わりを着想に表現を行っている。また、近年では子どもの主体性に任せた学校作りなど、試験的な教育活動にも取り組んでいる。9月25日まで開催中の「表現の森 協働としてのアート」展の出版作家。

WORKS

コミッションワーク

空のなかにある、さまざまな「空」

廣瀬智央 HIROSE Satoshi

《空のプロジェクト：遠い空、近い空》

Sky Project: Your Sky, My Sky, 2013

アーツ前橋の屋上にアート作品があることをご存知ですか。晴れの日、曇りの日、雨の日も、空のなかにさまざまな表情を見ることができる屋上看板は、アーツ前橋のコミッションワーク（委託制作）です。この作品は、イタリア・ミラノを拠点に活動する廣瀬智央さんと前橋市内の母子生活支援施設「のぞみの家」の子どもたちが、6カ月間に渡ってお互いが見ている空の写真のやりとりをした〈交換日記〉とワークショップを通じて制作されました。1963年生まれの廣瀬さんは、現実と記憶の世界が交差する作品や、見るだけでなく、匂うこと、食べること、触ることといった諸感覚に訴えかける作品など、目に見えない概念を見えるものへと変換するような表現を創り出しています。ミラノに住む廣瀬さんから見える空、そして前橋に住む子どもたちが見ている空。遠く離れた場所であっても空はつながっています。天候や季



Photo: 木暮伸也

節や場所、あるいは見る人の心境によって見え方は変わってくるでしょう。時間に追われて忙しく過ごす日々では、なかなか空を見あげることは少ないかもしれません。そんな時は空を見上げて自分の心と向き合う時間をつくってみたらどうでしょうか。

9月25日まで開催中の「表現の森 協働としてのアート」展では、廣瀬さんが各地で撮影した空の写真とともに、子どもたちの撮影した写真やこれらのプロジェクト資料を展示しています。あわせてご覧ください。

「うしろまえばし」はアーツ前橋のアートスクール受講生が立ち上げたプロジェクト。

まえばしぶんか探索隊

うしろまえばし

<https://www.facebook.com/ushiromaebashi/>

「スナックベベ」



絶妙な字体で、じわじわきます。
広瀬川沿いを歩いていて見つけました。
(隊員A)

「うしろまえばし」はアーツ前橋のアートスクール受講生が立ち上げたプロジェクト。

まえばしぶんか探索隊

作：あかしあ



まえばし

COLLECTORS FILE

街の人が集めているものを紹介してもらおうコーナー。それがなんであれ、好きならば集めてしまうのが人というもの。集めればそこに新たな美が宿る？

#1



立川町通り・栗本履物店

栗本亮さん

マンガ約3000冊



小学生の頃、弁天通りに家具屋さんみた
いのがあって、1時間50円くらいで
漫画が立ち読みできたんですね。
そこでジャンプだけでなく、昔の手塚
治虫作品とかいろんな漫画を読み漁った
のがはまるようになったきっかけ。



EVENT

まちなかイベント情報

「心にふれる手紙展」

2016年7月16日[土]～9月22日[木・祝] 9:00～17:00 水曜休み
前橋文学館・2階展示室

Maebashi 45DAYS プレイベント

「街中リバーフェス in 広瀬川」

2016年9月19日[月・祝] 9:00～15:00

広瀬川(雷神橋～展望橋)

広瀬川を舞台にSUP(スタンドアップパドル)、リバーボードなどのレースを開催。

「広瀬川 BBQ」

9月17日[土]～9月19日[月・祝] 17:00～22:00

広瀬川河畔 諏訪橋横

昨年の前橋〇〇特区45DAYSで行われた広瀬川バーベキューが今年も開催決定！

「ミニふわフェス」

9月18日[日]・19日[月・祝] 11:00～16:00

中央イベント広場

まちなかにミニ遊園地が登場！ころとんのふわふわドームで思い切り遊ぼう！

今月のおすすめ

by

ROBSON COFFEE アーツ前橋店



冷えたトニックウォーターにエスプレッソを注ぐエスプレッソ・トニック。コーヒーとは思えないようなフルーティーな酸味と、ほのかに感じるコーヒータンクの甘みがくせになる新感覚のドリンクです。

EXHIBITION

アーツ前橋 展覧会情報



Photo: 木暮伸也

「表現の森 協働としてのアート」

2016年7月22日[金]～9月25日[日]

開館時間：11:00～19:00 (入場は18:30まで)

休館日：水曜日

観覧料：一般 500 円／学生・65 歳以上・団体 (10 名以上) 300 円／高校生以下無料
その他各種減免あり

本展覧会では、前橋市内の福祉施設や地域コミュニティと協働しながら行う 5 つのプロジェクトを紹介します。また、「たんぼほの家」「釜ヶ崎芸術大学」「日本紛争予防センター」のような既に他地域で先駆的な活動をしている 3 団体の活動もご観いただけます。

アートが福祉や教育、医療の現場に入っていくことで、どのような化学変化が起こりうるのか、始まったばかりのアーツ前橋の新たな試みをぜひご覧ください。

私たちは現代社会の中で様々なしらみや境界に出会い、現状の社会的価値観の中で生きることの困難さを感じることもあります。このような社会において、アートや美術館にはどのような役割が求められているのか、考えていきたいと思います。

「コレクション+ 行為と痕跡」

2016年7月22日[金]～9月25日[日]

開館時間：11:00～19:00 (入場は18:30まで)

休館日：水曜日

観覧料：無料

「フードスケープ 私たちは食べものでできている」

2016年10月21日[金]～2017年1月17日[火]

開館時間：11:00～19:00 (入場は18:30まで)

休館日：水曜日 (11/23 開館、11/24 休館)、年末年始 (12/28～1/4)

観覧料：一般 600 円／学生・65 歳以上・団体 (10 名以上) 400 円／高校生以下無料

&Arts ISSUE 4 アンドアーツ 第4号

発行：平成 28 年 8 月 31 日 企画・発行：アーツ前橋 制作コーディネート：M-wave

編集：岡正己 編集・アートディレクション・デザイン：殿岡 渉 (あしか図案) 写真：上原ミワ、木暮伸也 制作補助：吉井あずみ

アーツ前橋 〒371-0022 群馬県前橋市千代田町 5-1-16 TEL：027-230-1144 FAX：027-232-2016 www.artsmaebashi.jp